

熊本市現代美術館 開館 20 周年

動きから生まれるリニューアルの可能性

日時 2022 年 9 月 27 日 (火) 14:00-14:30、10 月 12 日 (水) 13:00-13:30

場所 熊本市現代美術館 ART LAB MARKET + ホームギャラリー

講師 西澤徹夫 (建築家)

熊本市現代美術館では開館 20 周年を機に、主に 2 つの大きなリニューアルを実施した。ひとつは既存のショップと空きテナント状態が続く元カフェとを統合し、新たなスペース「ART LAB MARKET」として生まれ変わらせること。もうひとつは、ホームギャラリー (図書室) の机と椅子を新しくすることで、読書環境を整えること。日比野克彦館長が監修を務め、西澤徹夫建築事務所が設計を担当した。リニューアルオープンの前後に、西澤がツアー形式のトークを行った。本稿では、2 回実施したトークを再構成して掲載した。

■ 美術館リニューアルの時代

西澤 国内の美術館は 70 ～ 80 年代にあちこちで建ちました。その当時は市長や知事が、「うちの町で」「うちの県で」といって、目玉になるような作品を買い、美術館を建てていました。そうして一斉に美術館が建つ時代がありました。もう 40 年とか 50 年前です。「こういう美術館がほしい」という社会的なニーズがまだあいまいだった頃から、価値観が多様化していき、現在では「ああいうことをやりたい」「こういうことをやりたい」という今のニーズに対応できていない美術館がいっぱいあります。

大々的に建物を壊して美術館をつくり直すのにはお金がかかります。ですから僕は共有部分の家具やサイン計画などを見直すといったことによるリニューアルを東京国立近代美術館で手がけています。いつもクレームが来るようなサイン計画を見直したり、チケット販売周りの什器を変えたり、動線をちゃんと整理したりしています。

今、美術館で一番求められている機能は交流スペースです。子どものためのスペースとか、教育普及やラーニングのためのスペースがとても求められています。多くの美術館が建てられた 40 ～ 50 年前は、そういう発想自体が希薄でした。現在求められる交流スペースを既存の建物の中でどのように作りだし、かつ既存のスペースと新たなスペースのための動線をどう整理するか、ということが求められるわけです。

熊本市現代美術館がある建物自体、そもそも美術館としてつくられているわけではなく、美術館はテナントのようにして入っています。それをどのように新しくするかが課題でした。



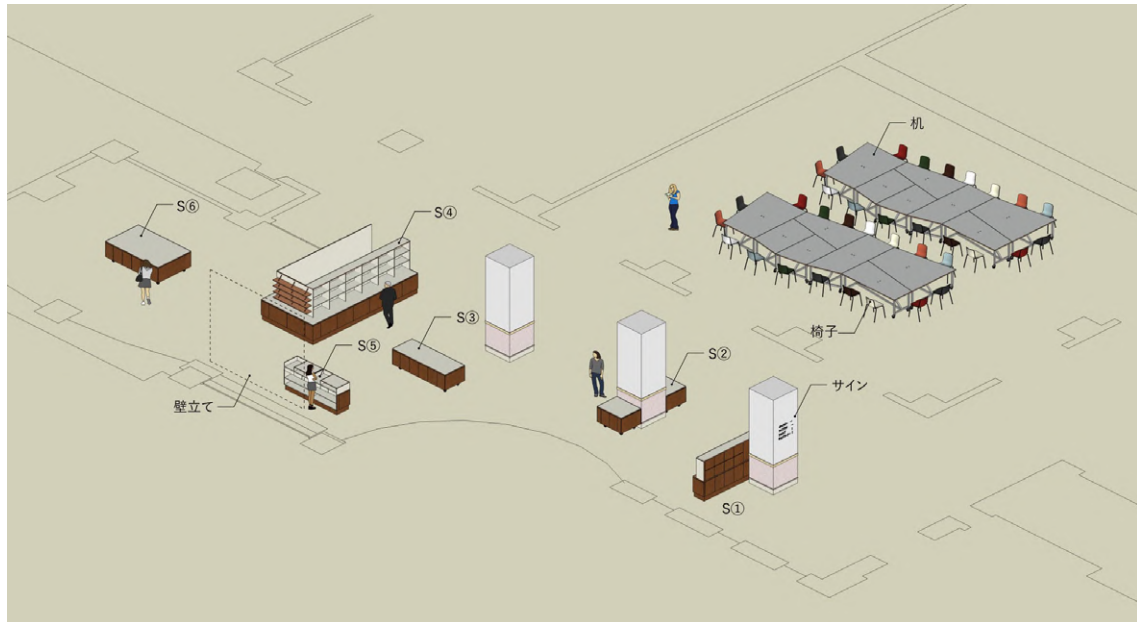
熊本市現代美術館 構成図

次元の異なる複数の課題

熊本市現代美術館館長・日比野さんからのリクエストは、現在のミュージアムショップと閉鎖していたカフェのところをつなげて、制作やワークショップをおこなう「ART LAB MARKET」というスペースをつくりたいということでした。ミュージアムショップは小さく細かな商品がいっぱいありますが、結局どれにフォーカスしていいのかわからず、既存の空間のちょっとクラシックな感じともあまり合っていません

とはできないし、床を全部張り替えると大工事になってしまいます。

それぞれの解決の仕方は全然違いますが、テーブルや棚などの什器を全て可動式でまづつくり、それらがあちこちそれぞれの場所に行くという解決が、コスト的にも時間的にも一番合理的です。そうすることで、空間それぞれの場所で、やりたいことができるようにしていこうと考えました。



西澤建築事務所による図面

動きを生み出す——入口からエントランス、ART LAB MARKET へ

美術館スタッフからのリクエストには、サインがわかりにくいので統一したいという話もありました。この建物はエントランス周りもすごく難しいです。建物に入ったときに、まず情報が多過ぎる。階段もある、ショップもある、これもある、あれもある。さらに時間が経っていくと、パーティションとか空気清浄機といった、この建物のデザインにもともと合っていない物が、後からどんどん増えていきます。それはしょうがない部分もちろんあります。

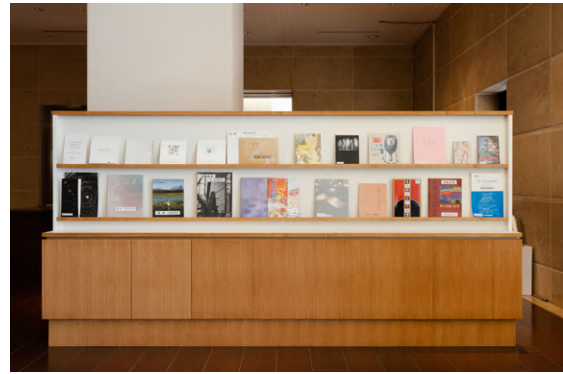
什器をつくるまえに、まずは建物に入ってすぐの総合受付カウンターの位置をいろいろ変えてみよう、みんなでスタディしました。というのは、来館者は入口から入ったとき、どこに何があるかがよくわからないんです。正面のポスター入り立て看板を見たり、横のカウンター上の入場料金表を見てチケットを買ったり、ちょっと忙しいんですね。だから、来館者に最初にちゃんと正面にフォーカスしてもらえるように、カウンターの位置を来館者の真正面に向くようにして、入口正面の柱にジェネラルなサインは集約するようにしました。その後、階段や行き先が分かれるところなど各所にサインを分散していくようにしています。各スペースにもちゃんと場所名を付ける予定です。このように、視線と動線ができるだけ自然になるようにサインを見直

しました。

以前は入口からショップ方向への空間が抜けていて、少し光も入っていましたが、カウンターの後ろ側に什器を置くことによって、一回視線をふさぎました。この什器は、受付のための収納が全面にあります。反対側は展覧会カタログや本を並べたりできるようになっていて、美術館の販売スペースになっています。



総合受付



総合受付背面の棚

すぐ近くの柱の両側にはショップ用の什器があります。もちろんキャスターで動かせるようになっていて、このあたりからが「ART LAB MARKET」のエリアです。ショップの什器は一応今回のリニューアル時の配置を初期設定としていますが、今後、動かしてショップエリアを拡大することも可能です。

ART LAB MARKET がはじまるあたりは、カーブになっているガラスから光が入ってきて明るい空間ですが、今まではここには何もなかったので、ART LAB MARKET と図書室の間のスペースに什器が出てきてもいい感じになっていくといいなと、まず思いました。「ここが廊下」「こっちが図書室」「こっちがショップ」というふうに分かれなくて、何となくはみ出したエリアで作業することがあっていいし、中に入ったところで作業することがあっていい。そういうふうに空間全体を使えた方がいいなという意識はあります。

限られた予算と短い施工期間の中で、できるだけ少ない棚で現状のショップの商品を扱う必要があり、それから、ART LAB MARKET ではワークショップも実施するので、そのスペースもちゃんと確保できるように集約したいという、やや矛盾する課題がありました。

以前は土産物屋さんみたいに狭い通路のところにいっぱい細かい商品があったのですが、広くすることで、もう少しゆったりしたディスプレイができるようになり、かつ、そのままワークショップができるスペースと重なることができました。すごく広いエリアがショップになったり、ショップ側にテーブルが入り込んでいってワークショップをしたり、混ざってしまっている。その方が活き活きとした活動ができるのではないかと思います。

いつ来ても少しずつ変わっているというか、変わっていないのに変わっている感じがして、動きを生み出すことができます。今回はこうしてみたけれど、やはりこういう方がいいというように、トライ・アンド・エラーで微調整や改良しながら、いろいろなことができるようにしています。



作品も展示販売できる有孔ボードの壁があるレジカウンター

レジカウンターの背面はガラス窓でしたが、有孔ボードを張っています。作品をかけられる場所がこのスペースには全然なかったので、いろいろなものが引っ掛けられるようにしました。エントランスから入って来る来館者が目につく高いところに作品がかけてあることで、アイキャッチになり、この空間全体が ART LAB MARKET だとわかるようにしています。また、ガラス窓のときは西日が差し込んでまぶしかったので、塞ぐことで遮光しました。

空間をつなげる——ショップと元カフェから ART LAB MARKET へ



ショップと元カフェをつなげた空間



ショップと元カフェの壁を囲う U 字の棚

以前、ショップと元カフェの間のところには、作り付けの仕切りの棚が入っていました。ショップと元カフェの部分との行き来ができなかったんです。それぞれ入り口は別々になっていました。今回は2つの空間を一体的に使いたいということで、当然、作り付けの仕切りの棚を取ることにしたのですが、元カフェは他の共用部と内装の様子がちょっと違って、レンガになっていたり、カリフォルニア風のバーカウンターになっていたり、全然テイストが違ったんです。だから最小限、表面を張り替えるだけで新しい什器と調子を合わせることに、ショップ側と元カフェ側をぐるっとU字の棚で囲い込ませることによって、空間に連続性をもたせました。床を全部張り替えると大ごとになってしまうので、什器を回り込ませて、そこにいろいろディスプレイすることで、ショップから元カフェへと自然に続くようにしました。お客さんは商品を選びながら、自然と2つの空間を移動することになります。

一番奥は半固定の什器です。あちこちに持っていけるようになっています。什器を全部広いエリアに出してきてショップのディスプレイとして使うこともできます。

2つの空間がつながったことで、建物の外からエスカレーターとか階段を上ってくる人がカーブしたガラス面越しに見えるので、ART LAB MARKETの奥から建物の入り口まで、長い視界の広がりが新しく生まれました。来る人と帰る人とがこの空間とつながるので、当初、日比野さんからオーダーがあったとおり、街と建物の3階にある美術館が連続するようにはできたと思います。

ART LAB MARKETには、あまり大きいディスプレイが来ないようにして、基本的には什器の下をストックにすることで、下の方に重心があるようにして、天井の上空の部分が大きく広がっていくプロポーションにしてあります。



大きな窓から街をのぞめる ART LAB MARKET

■ 不定形のテーブルとマルチカラー

ホームギャラリーのテーブルは、不定形な形のテーブルをパズルみたいに組み合わせることで大きなテーブルが二つできます。テーブルは全部バラバラになるので、少し空いたスペースに出して、資料を展示するとか、ショップの什器の間に挟み込むように置いてワークショップをすることもできます。共通する什器としてのテーブルが、完全にしまったりせず、館内のあちこちにいつもどこかにあることで、空間に流動的な感じが生まれ、既存のちょっとクラシックで静的な場所が、もう少し動的な空間になるのではないかと考え、全部動かせるテーブルを設計しました。



ホームギャラリー（図書室） ©Marina Abramović

このテーブルが不定形なのは、どちらかといえば子どもたちがワークショップをしたり物をつくったりするときのテーブルとしてイメージしているからです。もちろん、長方形の方がぴたっと合わせたりするのは楽なんですけど、既存の建物がややクラシックで静的な場所なので、少し角度をつけて遊びをもたせています。それぞれの机の辺は長さがぴたっと合ったり合わなかったりするので、組み合わせて変な隙間ができたりもします。ホームギャラリーの大きなテーブルをつくるように、ぴたっと隙間がないように並ぶパターンも考えてありますが、合っていないか隙間ができるのは全然許容範囲です。わざと隙間をつくってもいいようになっているので、そういう余白やズレも随所に生まれるテーブルをつくっています。脚はスチールで結構頑丈なので、割と乱暴な使い方をしても大丈夫な強度をもたせています。もちろんキャスターはロックできるようになっています。

テーブルの天板と椅子の色は、いくつか候補を出して日比野さんに選んでもらい、マルチカラーにしています。もちろんこういう選び方をすると、どの色にするか多少面倒くさいのですが、一色にしてしまうとどうしてもグレーとか茶色系とか無難な色になってしまいます。かつ、椅子がいっぱいあったりテーブルが大きくなったりしてしまうと、その色面の量が空間の印象を規定してしまって、すごくでっかいものに見えてしまうんです。だから、それぞれ色がばらけていて、大きい面にならないように、何となく渋目なんだけど全部色が違うというものを選んでいきます。

黄色い椅子があったり白い椅子があったりすると、100人分の椅子を並べたときに、仮にお客さんが座っていなくても、何となくにぎやかな感じにもなります。テーブルの天板の色が違っていると、「青いテーブルに集まってください」とかいうこともできるし、雰囲気を変えたりすることもできます。椅子が壊れて買い足すというときにも対応しやすいです。そういうことも考えて色を決めました。

■ 展覧会とアクティビティの連続

やっていることは、局所的に「ここはこういうことをやった方がいいよね」ということの部分解なんですね。というのは、要望もそうだからです。「元カフェは飲食もできるようなスペースにしたい」「カフェカウンターの見た目を何とかしてほしい」「ショップと元カフェは一緒に使いたい」「ホームギャラリーは落ち着いて本を読める環境にしたい」というバラバラの要望に対して、できるだけ一つの考え方でいろいろなことに対応できることをしないと、コストもどんどんかさんでしまうし、物もどんどん増えてしまいます。できるだけ同じ物をいろいろな用途で使えるような什器をつくる。

今回、唯一共通している材料は、家具などによく使うタモという材料です。入手しやすく汎用性の高いものです。この一つだけこれを共通の材料にして、後はそれぞれに必要な材料というのを選んでつくっています。形もモノも全然違うけれども、全体が何となく統一感があるようにしています。

今回リニューアルした ART LAB MARKET の一方には、メインの展示室があります。多くのお客さんは、展示を見終わると、そのままエントランスから出て帰ってしまいます。だから ART LAB MARKET の方に用がない、気付かない、ということがないようにしたいと考えました。そういう意味でも、テーブルが展示室の方にどんどんはみ出してあったり、展覧会関連グッズなども什器が展示室の方に出張してあったり、展示室を出ても何となく ART LAB MARKET とずるずるつながるようなレイアウトにしたり、その都度アイデアを出せばできるようにしています。ギチギチにならないように、いつもちょっと遊びがある状態がグーっと動いていく感じがたぶんできると思います。単に動くというだけの、すごく簡単な仕組みですが、展覧会と ART LAB MARKET のアクティビティがもっと連続すればいいなと思っています。

※写真：山中慎太郎 (Qsyum!)

ART LAB MARKET で実施した主なイベント（2022年度）



日比野克彦「ART LAB MARKET」公開看板制作
2022 年 10 月 12 日
写真：山中慎太郎 (Qsyum!)



マッチフラッグプロジェクト 2022 熊本
2022 年 10 月 12 日～12 月 1 日
写真：山中慎太郎 (Qsyum!)



新しい古本 0 円市 2022
2022 年 10 月 15 日



GIII vol. 146 Our Attitudes
[ワークショップ] 絵で絵をつくる——かたちを探して世界を描こう
講師：坂本夏子
2022 年 10 月 29 日



現代美術館で飲む珈琲
出店：珈琲自家焙煎豆売り専門店つくも
2023 年 2 月 23 日、25 日～26 日、3 月 11 日～12 日

構成・編集：池澤茉莉（熊本市現代美術館学芸員）